



革命^{しゅうえん}終焉、天龍源一郎引退

大和 浩

日本人で唯一、馬場と猪木をフォールした男。全日本、SWS、WAR、新日本、ノア、ハッスルを渡り歩き、鶴田、藤波、長州、高田、三沢らと激戦を繰り広げ、ミスター・プロレスと呼ばれる男、天龍選手の引退試合が昨年11月15日両国国技館で行われました。対戦者は新日本のIWGPヘビー級王者のオカダ・カズチカ。二人の対戦の発端は2013年のプロレス大賞の授賞式でした。最年少、かつ2年連続でMVPを受賞したオカダが、過去に2年連続で受賞した猪木、鶴田、天龍に対して「僕と同じ時代じゃなくて良かったですね」と発言したことでした。

生涯現役を宣言していた天龍でしたが、おん年65歳。年齢のせいではなく、腰の状態(脊柱管狭窄症)が思わしくなく、引退ロードに入っていた天龍はその発言を聞いて、最後の相手としてオカダにラブコール。しかし、団体が異なるオカダからの返答はなく、天龍は8月16日の新日本プロレス両国大会に乗り込み、リング上から掟破りの対戦要求という強硬手段に出ました。満員の観客が見守る中、試合を終えていたオカダが再度リングに登場。「天龍さん、どうなっても知りませんよ。それでも良いならやりましょう」と受けて立つのをテレビで見て、ネットでマス席を確保。東京の次男に「天龍の引退試合のチケットとれた。行く？」とメールしたところ、すぐさま「vsオカダですね。行きます！」との返信。さすが、わが息子。試合までの間、チケットを時々取り出してはニヤニヤ。こんなことは久しぶりでした。

ついに来た11月15日。高中正義の生演奏で天龍のテーマ「サンダーストーム」が流れると両国国技館は一気にヒートアップ。天龍と激戦を繰り広げてきた名選手たちが第一試合から盛り上げ、そして最終試合へ。

天龍の代名詞、のど元を狙った逆水平、グーパンチ、サッカーボールキック、延髄斬り、WARスペシャルを次々と繰り出すも、最後はオカダの必殺



技・レインメーカーでスリーカウント。38歳の年齢差、腰の状態を考えれば仕方のないことは分かっていた。超満員札止めの観客は、オカダに介錯され、燃え尽きる天龍を見届けに来たのです。

昭和の大先輩に大口を叩き、生意気な態度を取っていたオカダでしたが、マットに横たわる天龍選手に深々と最敬礼。思わず目がしらが熱くなりました。



引退セレモニーには盟友スタン・ハンセン、師匠テリー・ファンクが駆けつけ、引退ロードを切り盛りしてきた愛娘からの花束贈呈。そして、テンカウントのゴング。最後の「腹一杯のプロレス人生でした。ありがとう」という天龍の言葉が耳に残ります。感動的なシーンを見ながら、私は「腹一杯のタバコ対策人生でした」と言えるように頑張ろう、と心に誓ったのでした。